

「地域」につながる「聞き書き」

土居 裕美子 (Yumiko DOI)

鳥取看護大学 看護学部看護学科

はじめに

本稿で取り上げる「聞き書き」とは、文字通り対象となる人の話を「聞いて、書き記す」ことである。「聞き書き」は、聞くことを大切にしたコミュニケーションとしての「聞く力」によって支えられ、その人の言葉として書き記される「書く力」によって形となる。すなわち、「聞き書き」には、聞く力・書く力・それを語り手に還元する力が必要であり、ここに、聞き書きの可能性が凝縮されると考えている。さらに「聞き書き」は、ひとりの語り手の人生の物語の記録であると同時に、その語り手の生きてきた地域の文化・歴史の伝承としての意味を待つ。

近年、医療や福祉の場で「ナラティブ」への関心が高まり、「ライフヒストリー・インタビュー」や「聞き書き」の実践例が多く報告されている¹⁾。また、地域独自の歴史や文化を見直し、それらを次世代につなぐことへの意識の高まりの中で、歴史や文化の保存・継承を目的とした取り組みとして、あるいは語りを通して地域の課題を具体的に捉え、地域理解を深める「地域人材育成プログラム」として、各地でさまざまな「聞き書き」活動が行われている²⁾。

これらの背景を踏まえ、本稿では、平成29年度に本学で実施した「聞き書き」のプロジェクト、『聞き書き集 鳥取県中部地震の記憶』の取り組みを振り返りながら、【「地域」につながる】をキーワードに、現段階で考えている「聞き書き」の可能性について考えてみたい。

1. 『聞き書き集 鳥取県中部地震の記憶』の作成を通して

平成29年度、鳥取県からの委託を受けて、平成28年10月の鳥取県中部地震からの復興支援と位置付けた「聞き書き」活動を実施した³⁾。鳥取県中部の、特に被害の大きかった1市3町（倉吉市、湯梨浜町、北栄町、三朝町）の被災者・支援者の体験や、被災時とその後の地域や暮らしの変化について「聞き書き」を行い、震災からちょうど1年となる平成29年10月21日に冊子化して発行した。

鳥取看護大学の1年生6名、2年生2名が参加し、グローバルセンターの支援のもと、鳥取看護大学・鳥取短期大学の教員3名が指導・編集に携わった⁴⁾。

以下に、具体的な語りの内容を一部紹介する。

やっぱり、蔵をなくすっちゃうのは、もったいないですねえ……。昔からあるものだけね。あの蔵は、昭和五年と九年に二度、水害で浸かったです。そんな思いでもある蔵ですね。

それに、蔵を解体したら、そこがガラッとしますが。さびしいけんどうしようかと思って、あすこの庭木をね、こっちに持ってこようと思ったです。でもできなくてねえ。根回ししてちゃんとして、根が付けばいいけど、つかん時は何十万かかかりますが。やっぱり他の機械なんか持ってきてもらうだけでも、何万円ですけな。それで、作業場の横の、あの庭木はみんな捨てちゃうですが。もったいないなあと思ってねえ。さびしいです。懐かしくて……。もったいな

くて……。 (中略)

震災後で変わったことと言えば、うーん、やっぱり、芯が強くなったかな。またこれから必ずこういうことがありますけん。ないとは限らんけん。だからまたこんなことがあっても、くよくよせずに、今を楽しみに生きていこうと思います。

私、今 87 歳ですけどね、100 歳まで生きようと思ってねえ。みんなに、発表しとるですよ。そう、100 歳を目標にして。100 まで生きるためには、90 歳まで元気でいようと思うです。自分の好きなことを精一杯して、楽しみながら生きるかなあ、ってね。ふふふ。

「失った悲しみを乗り越えて、楽しみながら生きる」

語り手の 80 代の女性は、学生との対話の中で、過去と現在を行き来しながら自身と向き合い、未来を肯定的に捉えて「前を向いて楽しく生きていく」と力強く述べられ、印象的な「聞き書き」となった。

この取り組みに参加した 8 名の学生たちは、まず自身の課題としてコミュニケーション力や文章力の向上の必要性に直面することとなった。語り手の語りたいことをちゃんと聞き取れているか、語りたように語ってもらえているか、語っていただいた内容をその方らしい話し言葉できちんと紡ぐことができているかなど、自身の未熟さや不安と向き合いながら取り組んでいる様子が見られた。また、それぞれの語り手の職業や地域での役割について、正確に記述するために、何度も録音を聞き返した上で、歴史的事実や社会制度を調べるなど、知識・理解の広がり・深まりが見られた。さらにそれらを看護と関連づけて捉えることで、人との出会いから学ぼうとする姿勢や、素直に他者を尊重する態度など、人との関わりを原点とした多くの学びを得ているように感じられた。



このことに関連して、看護学の中では特に老年看護学や在宅看護学において、高齢者へのライフヒストリー・インタビューや「聞き書き」を通した学生の学びに関する報告がなされている。それらの多くをまとめると、高齢者の理解と敬うべき対象としての実感、高齢者の人生と経験の意味を理解することの重要性、高齢者看護のあり方に関する抱負などが、学生の学びとして引き出されている⁵⁾。

これらのことから、現在学内の共同事業『聞き書き』の実践とその教育効果の検証」として、地域の高齢の方の自宅を訪問する形の「聞き書き」や、専門職対象型として元保健師の「聞き書き」を行い、それらを通した学生の学びについての考察を行っているところである⁶⁾。今後、ナラティブやライフヒストリー・インタビューと「聞き書き」との関連性、語る側への効果としての「回想法」との相関性など、周辺にあるさまざまな取り組みの中に「聞き書き」を位置付けていければと考えている。

ところで、上記の大学の取り組みを始めるにあたって参考としたのは、災害からの復興支援における「聞き書き」として近年特に注目を集めたプロジェクト、公益財団法人 東京財団と NPO 共存の森ネットワークによる『被災地の聞き書き 101』⁷⁾であった。これは、東日本大震災に遭われた方々に対

して、主催者である東京財団・共存の森ネットワークのスタッフや、大学生・社会人のボランティアが1対1で聞き書きを行った大規模な「聞き書き」プロジェクトである。

この『被災地の聞き書き 101』プロジェクトの意義は、単なる被災体験だけでなく、被災者の生い立ちから現在に至るまでのライフストーリーを丁寧に記録することに重点を置いていること、被災者と非被災者との交流、特に「高齢の語り手—学生を中心とした若い聞き手」という世代間交流があること、地域の特性やそこに生きる人々の「地域への思い」が語られ、書き残されること、などの点から、「聞き書き」の特徴を最大限に活かした、震災復興支援の一つの形になっている点にある⁸⁾。

2. 「地域」につながる「聞き書き」

あたかも「この本の中にこの人が生きていく」と感じられるように、聞き手が語り手の言葉を紡ぐ「聞き書き」は、語り手と聞き手との双方向のやりとりによってはじめて成立するものである。「聞き書き」を間において、語り手と聞き手とが向き合い、時に寄り添いながら行うインタラクティブな作業であるともいえる。このことに焦点を当てつつ、上記を踏まえ、【「地域」につながる】をキーワードに「聞き書き」の可能性についてももう一步考えを深めてみたい。

まず「聞き書き」には、他者を通じた自己との出会いがある。聞く側は語り手という他者の語りから、自分自身の生き方を相対化し、見直すことになる。「聞いて書く」作業の中で自身のコミュニケーション力・文章力に真摯に向き合わざるを得ない場合もある。一方語り手は、「聞き書き」というプロセスを経て、聞き手という他者を経由した自分自身の「語り」と出会う。「ひとり語り」ではなく、聞き手あってこそその語りである。このことは、「聞き書き」が地域の中に「人と人（多くの場合「世代」）をつなぐ場」を創出することにつながる。

また「聞き書き」には、現時点での対面だけでなく、時空を超えたつながりがある。「聞いて、書いて、残す」作業である「聞き書き」は、生きてきた時間を持った、かけがえのない唯一無二の人の人生（過去）を描くと同時に、未来（次世代）に向けての伝承の場となる。聞き手は、語り手を通して自分の知らない過去の出来事、当時の人の思いに触れる。語られた全く個人的・個別的な出来事が「聞き書き」として書き残されることで、語り手が亡くなった後も、そのご家族や、まだ生まれていない子孫、いつかその地域で暮らす人たちの未来にとってより大きな、普遍的な価値を持つ。

さらに「聞き書き」には、地域の文化とのつながりがある。語り手の具体的な生きた姿としての「聞き書き」には、その地域の日常生活に根ざした伝統や文化が背景として確かに存在している。方言で書き記されれば、言語文化資料としての価値を持つ。「聞き書き」の作業を通して、聞き手・語り手ともに、文化・歴史の中で形成されてきた地域の生活文化のありように気づくことができる。

このように考えられるとすれば、「聞き書き」は、現在の出会いを通して、世代を超えたつながりの中に、そして地域の生活文化の中に、「かけがえのない他者／かけがえのない自己」を見出すプロセスとしての可能性を持つと考えられる。それは単なる世代間交流を超えて、語り手にとっては、生きた自分を肯定的に捉える、生きて来てよかった、という思いを確認する場にもなるのではないだろうか。

さらに本学の教育の面から考えるならば、学生が地域の中でかけがえのない他者に出会う経験は、「漠然とではあるが、包括的アセスメント・全人的対応のための力を育成するために地域活動は効果的であることは推察できる」⁹⁾と述べられるように、語り手の人生を尊敬し、学ぼうとする姿勢、看護職として、今ここにいる「かけがえのない方」の過去・現在・未来を共感的に受け止める姿勢の育成につながっていくのではないかと考えている。

おわりに

筆者自身、「聞き書き」の体験を通じて、語り手との「出会い」の意味を深く考えるようになった。

本学に着任する前、4年前の頃は、日本語史を専門とする自身が「聞き書き」について、看護学教育の観点から考えることになるとは全く思いもしていなかった。「聞き書き」を通して人とつながり、多くのご縁を得て、新しい世界を知ることができたと感じている。

一方振り返ってみれば、現在に至るまで、自然な語りを大切にする方言学から学んだこと、物語の力を信じる文学から学んだこと、そして何より、過去の時代に書き記された文献から言葉を大切に扱い、当時を生きた人々の物の見方や考え方を、時空を超えて捉えようとする日本語史の考え方は、確かにこの「聞き書き」を通じた学びにつながっている。今後も、この鳥取の地域で、これらのつながりを大切に、「聞き書き」に向き合っていきたいと考えている。

《注》

- 1) 「ナラティブ」に関しては、佐藤信彦「ナラティブホームの物語—終末期医療をささえる地域包括ケアのしかけ—」『医学書院』(2015)、小松田儀貞「社会的実践としての『ナラティブ』」『秋田県立大学総合科学研究集報』第18号(2017)、pp. 9-17など。医療・福祉現場での「聞き書き」の取り組みに関しては、松田ヒトミ他「回想法における聞き書きボランティア導入の試み 個人誌の冊子作成とスタッフの意識変化について(第1報)」『認知症ケア事例ジャーナル』第3号第4巻(2011)、pp. 364-370。松原直美他「『聞き書き』活動による高齢がん患者の生き方に及ぼす変化と看護実践への可能性を探る」『日本看護学会論文集：看護管理』第45号(2015)、pp. 335-338、岡美智代他「その人らしく生きるための支援方法の開発『じっくりEASE(イーズ)プログラム』における『聞き書き』について」『日本慢性看護学会誌』第11巻第1号(2017)、pp. 34-38など。
- 2) 坪井麻衣「わたしを映しだす鏡との出会い」『集団力学』第34巻(2017)、pp. 21-64。柴田沙緒莉「小さな一歩から未来へと」(赤嶺淳・佐野直子編『海士伝3 海士に根ざす—聞き書きしごとでつながる島(グローバル社会を歩く⑨)』『新泉社』(2015)、pp. 191-195。渡辺暁夫「『聞き書き』による新たな「物語」—歴史、記憶、世代をつなぐ「場」の創出—」、『東北公益文科大学総合研究論集』第34号(2018)、pp. 23-53など。
- 3) 鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター編『聞き書き集 鳥取中部地震の記憶』(2017)。鳥取県元気づくり総本部 元気づくり推進局参画共同課「鳥取県の人々のあたたかさ発信事業」による。なお、本稿中のスナップ写真は本書からの再掲である。
- 4) 指導・編集にあたったメンバーは、岡野幸夫(鳥取短期大学国際文化交流学科 教授)、森脇あき(鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター 兼任研究員、鳥取短期大学幼児教育保育学科 助教：当時)と筆者の3名である。
- 5) 尾崎章子他「老年看護学教育にライフヒストリー・インタビューをとりいれた学習成果」『東北大医保健学科紀要』第25巻第1号(2016)、pp. 39-45。駒谷なつみ他「高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと」『保健科学研究』第8巻第1号(2017)、pp. 33-40など。
- 6) 平成30年度 鳥取看護大学・鳥取看護大学 地域研究・活動推進事業助成金による。
- 7) 『被災地の聞き書き101』(東京財団 2012年)。HP:東京財団×共存の森ネットワーク 被災地の聞き書き101, <http://kikigaki101.tokyo-foundation.org/> (2018. 3. 8)。その他、震災体験を書き残すプロジェクトとして、高倉浩樹監修『聞き書き 震災体験—東北大学90人が語る3.11』『新泉社』(2012)などがある。
- 8) 注7) HPでは、活動の趣旨について、「『被災地の今後の暮らし』につなげる」「『私たちの生活の見直し』につなげる」としている。
- 9) 田中響「地域の『場』と『機能』—地域とともにあゆむ大学—」『グローバル(鳥取看護大学・鳥取短期大学グローバルセンター年報)』第1号(2018)、pp. 13-18。